

西の辺境の親愛なる隣
人

158532

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

臆病で寂しがり屋で、人として懂れるのはスパイダーマンな転生者さんが、優しい系の神さまに出自と経験と邂逅を調整してもらって第二の命を貰うお話。ただし引越し先は四方世界・オブ・ゴブリンスレイヤーな！

目次

事の経緯（コンストラクション）

1

既知との遭遇（コネクション・チョイス）

10

朝が来る（オープニング・デイズ）

24

事の経緯（コンストラクション）

『諸神もすなる異世界転生といふものを、女神もしてみむとてするなり』

「つまり乗るしかない、このビッグウェブに！ということですか？」

『話が早くて助かるよ！お互い分かる人とやった方が面白いしね！異世界転生詳しくない人に説明するの面倒だし！』

「転生ものの利点は話の早さですもんね」

というわけで目の前にいる女神さま（その胸囲は豊満であった）が僕を異世界に生まれ変わらせてくれるらしい。人生どうなるかわからないものだ。終わった後で思い知ることになるとは思ってなかったけどね。後悔は先に立たないというが、どうやら先があるようなのでここは目一杯しておくべきだろう。計画して実行して省みて改善するのだ！

「というわけで己の人生を振り返ってみたところ、二点ほど考えまして」

『聞こうじゃないか！』

「来世はもちっと人に話しかけようと思います」

『そうだね。ボクもそれが良いと思う』

人に話しかけるのが怖くてそのままぼっちになってたのが僕というやつなんだよな。この広大無辺なウェブ世界を前にしてTwitterで人に絡むことも出来ず、TRPGのルールブックを買ってきても自分で読んだり一人でキャラビルドしてたのだ。野良で集まってオンラインセッションとか、誰でも参加できるコンベンションとか幾らでもあるのにな！

『なんかごめんね・・・幼馴染とか長い付き合いの親友とかいたらもつと自信が持てたかな？』

「いや、もしも僕みたいなのに親友がいたらべつたり付き合い合つて迷惑かけまくつてゆつくり離れられるよ。僕はそういうやつだよ」

『そういうところでぞキミ！』

自虐したら怒られた。さてはこの女神さま、めちやくちや優しいな？

「ところでどうして僕なのか聞いてもいいですか？別に轢かれそうになつてる子供とか助けてないし、たくさんの人に幸せを振り撒いたりもしてないですよ。意識が朦朧としてたけど、多分季節の変わり目に風邪拗らせて死んだだけですよね？」

『うん・・・』

「まあ看病してくれる人とか居ませんでしたし」

『うん・・・』

「つまり、もつと立派な人とかそこら中で幾らでも死んでると思うんです」

『そこは聞かれると思つてたし、だから胸を張つて言える答えは用意してあるよ』

定番だしね、と微笑みながら女神さまはその豊満な胸を張る。

『立派な人と報われるべき人は違うんだよ。まあボクの主観の話だし正確に言つと、立派だと思ふ人と報われて欲しいと思ふ人は違うんだ。評価軸がね』

「つまり僕は立派じゃないけど幸せになつて欲しいんですね」

『前者のことはあまり気にしないでね？それはキミ自身が下した評価に則つてるだけだから』

たしか仏教には悪人正機説なるものがあつた気がする。悪人こそまさに救いが必要なのだ、慈悲はある。とかそんな考え方だつたか。

『雑だけど浄土真宗だね。似たような事は聖書にも書いてある。神の国は貧しき者や賤しき者にこそ開かれてるとかそういうやつ。まあ救いが必要な人つて要するに救われてない人のことだからね』

「神さまは生前は救つたりしないんですか？」

『昔は結構手出ししてたしヤンチャもしてたよ？極悪なの鎮めたり、ヤバい連中沈めたり』

「この方思つてたよりガチの神様なのは？」

『でもまあ眷属に叛乱起こされたりして、ボクも反省したわけさ。どう生きるかは人それぞれ、自由意志を尊重するよ』

やはりガチでは？

『まあボクの話はどうでもいいさ、キミを選んだのはちようどいいタイミングで死んだ人たちの中で、ボクが個神的な趣味の範疇で何かしてあげたかったのがキミだっただけさ。深く考えなくていいよ。考えてもいいけどね』

「全人類の中で？」

『全員見てるし、他所に行っても見続けるよ』

「そうですか神さますごいですね」

『それほどでもないよ』

「ネットスラングにまで精通しているのに謙虚だ」

そうか、見られていたのか。宇宙より広い視野で見ると僕はひとりぼっちじゃなかったらしい。ほんのちよつとだけ来世に前向きになれた気がする。

「ちなみに僕の過去世ってどんなでした？」

「美味しいつかまきになったよ」

「今後お肉とか食べ辛くなるなあ」

来世が知的生命体だけでめちやくちやラッキーな気がしてきたよ。

「でも僕みたいな非生産的な誰の為にもならなかったオタクが神さまから凄いパワー貰った力頼みに大活躍してワーキヤーヒーミみたいなのは解釈違いかなって思うんですよ」

『えー、いいじゃん神様転生！無理強いする気はないけどさ、ボクとしてはキミに幸せになつてほしいだけなんだけどなあ。あと流行つてるし』

「特別なことしてないのに特別扱いされるのはちよつとずるいですから」

『ボクの贈り物をずる呼ばわりされるのは心外だな。次にそれ言ったら意味もなくキラキラ光るようなすごい贈つちやうぜ？』

「あつはい恩寵ギフトです」

よろしい、と大仰に頷く女神さま。やはり神たるもの人間に会ったら何かしら良いものを振る舞つたりしたいのかもれない。自分のところで幸せになれなかつた者に餞別を与えたい、と考えるなら自然な感情なのだろう。しかしそういうのを素直に受け取れる人間ならもうちよつとマシな人生送つてたのが僕なのだ。

『分かつてたけど面倒臭いなキミ』

「そうでしようねえ・・・」

『まあここは素直に受け取つておきたまえ。他の神のところに投げるんだから世界観無視したようなのはやらないし大丈夫大丈夫！』

一部の出自と経験と邂逅とかを骰子から指定に変えるぐらいだよ！と彼女は語る。自由意志を尊重すると言うぐらいだから、その先は僕次第なのだろう。まあそれなら・・・でもなあ・・・

『なりたいたい自分や憧れのひと、あるだろうか？』

そう言われてしまうと面白い付くものはたくさんある。どれも実在の人物ではなく創作上のキャラクターなのが少し恥ずかしいけど。

『人間が憧れるのはこれ全て物語だよキミ。それが実在の人物だろうと伝聞や想像に過ぎないさ』

「しかし、うーん。神さまなら僕が何と答えるかぐらいは分かかってそうなのですが」

『キミが、自分で、口にすることが大切なのさ。時間をかけてもいいからキミの想いが聞きたいな』

神さまにこうまで言われては観念するしかない。大好きな物語の登場人物たちを思い出し、主に人間性を考慮してひとり選ぶ。

「僕はスパイダーマンみたいな人になりたいです」

『かつこいいし良い人だよね！』

「そうなんです」

そう、スパイダーマンはかつこよくて良い人なのだ。ごく小さなことでも世界の命運

をかけた大事件でも関係なく、そこにいる誰かの為に戦うひと。大いなる責任を己に課して平和を守るヒーローに僕は憧れる。スパイダーラックは欲しくないけどね。

「別に大いなる力は欲しくないけど、僕の憧れはスパイダーマンです。ちなみにピーター・パーカーと小森ユウくんは忍殺語使うやつ以外はわかんないです。主にアルティメットなアニメ版が好きです」

『スパイダーバース上映前に死んじやったかー』

「コミック版、多少高くても買っておけばよかったですよ」

来世にアメコミが存在することを求めるのは間違っているだろうか？

『ちなみに生き様とか人間性はキミ自身に依存するのでボクにはどーにもなりません』

「まあ当然ですよね」

『だからキミ次第でかつこよく生きることでもできるよう、努力ではどうにもならない部分を調整するのがボクの仕事だね。命を産むのは神のやること、命を使うのは人のやること』

「そしてどうなるかを見守るだけ、いやいつでも見守ってくれる……」

自信のない極度の寂しがり屋の僕に、これ以上ありがたいことがあるだろうか。この事実だけでおかわり三杯いけるのでは？どんなに辛い状況でも奮起努力して強く生き

ていけるのでは？

・ ・ ・ いやそれは無理だろう。流石に樂觀しすぎだろう。僕がそんなにポジティブを維持できるやつならもうちよつと良い生き方ができただろう。今の僕を包む自己肯定感は一時の高揚感に過ぎない。人間が信仰心を維持するには仏舍利とか十字架とか戒律とか、どうしても形ある証が欲しいのだ。だから聖遺物とか勝手に増殖するんだ。

「ということに神さまと実際に会った物証とか貰えます？無いと多分あーあれはただの妄想だったんだなあという方向に落ち着くと思うので」

『たしかに人間ってそういうところあるよね』

「愚かな人類ですみません」

『いやあそれは賢さに分類していいでしょ。忘れること、変わることも大切さ。キミだつて無理に義理立てしようと思わず、好き放題替えたり方針転換していいからね』
すぐに自殺されたりしたらへこむかもしれないけど、と呟きながら女神さまは衣服の
一部——青色ブルーの飾り紐リボン——を抜き取った。

『必ずキミの元に届くよう手配しよう』

「ありがとうございます」

『なあに良いつてことさ、本当ならもつと色々あげたかつたぐらいだからね！』

「もし生まれ変わって巨乳に育ったら、その紐で胸を支えます」

『いやそれは無いかな』

「どうやら僕が巨乳になる可能性は微塵もないらしい。細かいところまで既に決まっているようだ。」

『というかキミ、哺乳類にならないから』

「マジですか」

『キミの来世は蜘蛛アラネイド人だよ』

「さてはガチファンタジーですね？」

「かくして僕は究極のスパイダーマンを目指してアルティメットに生きることになったのだった。おそらく地球ではない剣と魔法の世界で。」

既知との遭遇（コネクション・チョイス）

どうやらここはゴブリンスレイヤーの世界らしいぞ、とボクが確信したのは生まれてからおよそ十と半分の時が過ぎた忙しい秋のある日だった。

およそというのはボクが地母神の神殿に捨てられた孤児なので、正確な年齢が分からないから。忙しいのはこの広い礼拝堂が、怪物退治から帰ってきた冒険者のための即席治療所になったから。そしてここが何の世界か確信できたのは、二人の男を目前にしているからだ。

「おうい、こいつも頼むぜ！」

ボクと横に立っている幼馴染——便宜上の誕生日が同じだ——に声を掛けたのは長槍を担いだ軽装の冒険者。今はまだ白磁等級。ボクは彼を知っていた。とはいえ彼だけ見たらここはアイルランドだという線も無くはない。

決定的なのはもう一人、槍使いの男が肩を貸している薄汚い革鎧の冒険者の方だ。左手には傷だらけの小さな丸盾、顔は鉄兜で隠れて、腹部には刺し傷もある見窄らしい男。同じく彼も白磁等級。

その男をボクはよく知っていた。

憧れの英雄より彼についての方が詳しいし、なんな

ら蟲人じぶんの生せい態たいよりも分わかかつている。

「小鬼ゴブリンスレイヤーを殺ころす者もの……」

「この変へんなの、俺おれより早はやく名なが売うれてやがる」

「いや、槍やり使つかいさんの話わたしも聞きましたよ。なんでも鉾こ山やまに現ありましたら岩いわ喰く怪かい虫ちゅうを倒たしたのは貴き方かたであると」

「徒アライアンス党どうでの共き同どう戦せん果がだがな」

「いや、話わしてる場ば合あじやないですよね！」

幼アコライト馴な染せんの侍さむらい祭まつりに怒こられてしまった。丈ぢやうの合あっていない継ついで当あたてだらけの法ほふ衣い（破やぶれたとなったら右みぎに出る者ものはあんまりいない）に身みを包かんだ小こ柄がらな彼かの女にょは今いま年ねんで十じゅう歳さい。同どうじ日ひに拾ひろわれたボクも都みやこ合あ十じゅう歳さい。そして我われらがゴブリンスレイヤーさんは十五じゅうご歳さい、冒ぼう険けん者しやデビュうしたばかりで傷きずだらけ、ボクは状じやう況きやうを把にぎ握りした。

「おう、というわけで忙いそしいとこ悪わるいが、街まちの入口いりぐちでぐつたりしてたこのゴブリンスレイ野郎野郎を見みてやってくれや」

そう言いって槍やり使つかいさんはボクを見み上あげた。

「ええ、ここから先まは私わたしが運はりましよう」

ボクは片かた足あしを曲まげて、肩かたの高たかさを槍やり使つかいさんに合あわせる。ずしりとゴブリンスレイ

ヤーさんと装備の重量が移ってくる。街の入口はそう遠くないが、あまり良く思っていない彼を一人で運んでくるのだから、やはり槍使いさんは優しい人だ。

「じゃあ後は任せませ、お二人さん！」

「あ、は、はいっ！」

「貴方がした事は必ず伝えておきます」

「やめろやめろ気持ち悪い」

恐ろしくばつの悪そうな顔を向けたあと、彼は手をひらひらと振って去っていった。とはいえボクはもちろん教えるつもりである。良いことは吹聴されるべきだし、ゴブリンスレイヤーさんにはもつと人間のあたたかみとかに触れてもらいたいから。特にこの頃の彼はヤバかったはずだし。

「それじゃあ運ぼっか」

「うん、あっちの方に空いてる毛布があるよ！」

「案内よろしくね」

背の高さと頭に八つも眼球があるボクは空きスペースをすぐ見つけられるが、可愛らしい金髪を揺らしながら小走りする少女の背中についていく。まさか彼女が後の女神官さんであるとは思ってもよらなかった。

五年前、つまり勇者が現れぬまま言葉持^{ブレイヤー}つ者と祈らぬ者^{ノンブレイヤー}どもの決戦が起きた年、多く

の人々が死に、ゴブリンスレイヤーさんが生き残り、剣の乙女や蟲人僧侶らを含むサムライ一党が魔神王をぶち殺したその年に、ボクと彼女は神殿に拾われた。

自分が転生者だということを思い出し始めたのが七歳ぐらいだったか。その頃のボクは同年代の只人よりも小さくて、前世のボクより臆病で水に映った自分の顔を見て怯えたりしていた。(周りの人はすぐに慣れて平気になっていった。つまりボクだけこの未確認生命体第一号めいたガチ蜘蛛フェイスに耐性がない、おかしな話だ)寝ている時に蜘蛛糸を漏らしてひどいことになったりもした。ボクはそんな感じの弱虫人だったので、彼女がお姉さんみたいな態度を取り始めたのも当然のことだった。

しかし前世のことを思い出したのと関係があるかは分からないが、ボクの身体が急速に成長し始めて、今では槍使いさんすら越える七フィート弱二メートル近くまで成長してしまった。もともと蟲人が急成長する年頃だったのだろう、というのが神官長さまたちの見解だけどボクは違うと思ってる。これはあの青い紐の女神さまの恩寵なのだろう。だってこんな大きく育てるほどたくさんのご飯食べてないしね!科学の世界を生きたボクとしてはどう考えてもおかしいと思う。物理法則が違うって言えばそれまでなんだけどさ。

「冒険者さん、ここに寝かせよっか」

「オツケー姉さん、頭支えてね。兜で重いから気をつけて。角の断面で手え怪我しないようにね」

床に敷かれた毛布の上に傷付いたゴブリンスレイヤーさんを横たえる。わわっ、なんて可愛らしい声を上げながらおっかなびっくりという手つきアラネイドの少女に手を貸してもらおう。蜘蛛人といえど手足は二対しかない。それなら頭部のデザインにもうちよつと手心を加えて欲しかったけど。率直に言って第1話で蹴り殺される顔だもの。

くりくりした青い瞳を懸命に動かして、傷の程度を確かめる彼女の顔と、一仕事終えてきたぼろぼろのゴブリンスレイヤーさんの姿を、ボクの八つの目が捉える。傷付いたひとを癒すひと、傷付けるものを殺すひと、ひとを助けるひとたち。

「この人はあまり重い状態じゃあないかな。とりあえず装備を外して汚れや血を拭っておくよ」

「それじゃあわたしは・・・」

「誰か手の空いてる子がいたら包帯、綺麗にしてきてー!」

「行ってくるね!」

「転ばないよう気をつけてね」

年上の神官さんの命を受けて、姉さんがぱたと走っていく。体格差がえらいことになつても精神年齢差が大きく開いても、ボクは彼女を尊敬している。そしてなによりお姉さんぶつてる姿がとて愛おしいので、ボクは彼女を姉として扱う。

気を取り直してボクも目の前のやるべきことをする。身体が少しでも楽になるよう、

ベルトや留帯ストラップを外して出来る限り装備を剥ぎ取っていく。ボク、あのゴブリンスレイヤーさんを脱がしてる！スゲエな！四方世界にも三千世界にも変なのを脱がす奴とか、家族と勝利したゴ布林以外にボクだけでしょ。たいへん貴重な体験ですよこれは！このようにアホなことを考えながら——ボクはミーハーなのだ——も手は動かしていたボクの目の前で、奇跡が起こった。

——いと慈悲深き地母神よ、どうかこの者の傷に、御手をお触れください——
生まれてからずつと聞いてきた、生まれる前から知っている鈴の鳴るような、それでいて芯のある声が聞こえた気がした。

「《小癒ヒール》の奇跡……」

暖かな、優しい光がゴブリンスレイヤーさんの身を包んでいた。彼女が始めて起こした奇跡が、再び彼の命を救った奇跡を、ボクは目の当たりにする。姉さんの祈りと地母神の慈悲が形を成したのだ。

ほんの少し嫉妬する。拾われてから五年間、深く祈りと感謝を捧げてきたボクはまだ奇跡を授かっていない。ほんとの信仰が地母神さまに向かつてないんだから当然のことだけだ。

負けてはいられないな。そう決意を新たにしたボクの手元から小さな声が聞こえた。薄暗い庇の奥の赤い目と、ボクの八つの視線がかち当たる。

「・・・ゴブリンか？」

「いや違いますけど」

「そうか・・・」

「たしかに肌は緑色ですがね」

よく見たら彼の手が腰の武器の辺りにあった。ゴブリンだったら死んでたぜ。

「ここは貴方が暮らす辺境の街の神殿です」

「そうか」

「貴方は冒険から帰る道中で倒れて、他の冒険者さんに運び込まれました」

「・・・冒険者」

「長い槍を持った顔の良い白磁等級の方です。分かりますか？」

彼は僅かの間考えて、心当たりはあると自信なさそうに答えた。

「俺は、冒険者に助けられたのか」

「はい。後できちんとお礼を言ってくださいいね」

「・・・そうだな。そうすべきなのだろう」

「貴方の傷を《小癒ヒール》の奇跡で癒した私の姉さんにもですよ」

「そうしよう」

そう応えて無造作に立ち上がるとうする薄汚い男をボクは押し留める。ぼろぼろの

体で動き回られると周りが堪えるのだ。

「姉さんやもつと上の姉さんと呼んでくるから、そこで休んでいてもらいます」

彼はそれでも動こうとするが、腰と左手が床から離れないことに気付く。絹のように白い謎の粘着物がその身を束縛していた。

「……これは、蜘蛛の糸か？」

「魔術スベルのとは違うけど、ボク流の《粘糸スパイダーウェブ》です。ボク以外が外そうとするとたいへん面倒なので、大人しく諦めてください」

彼には諦める気が無さそうだったが、ボクはさつさと洗濯場へ向かう。侍祭は使用済み包帯の詰まった洗濯桶に手を突いていた。その息は全力疾走した直後のように荒く、額からはだらだらと汗が垂れ落ちる。天上の神と接続して奇跡を起こした代償だ。

「手伝いに来たよ。疲れてるみたいだし代わるね」

「うん……ありが、とう……」

長い脚を折り曲げて屈み込み、彼女を寄りかからせて血まみれの包帯を洗う。水を交換して擦り、また水を交換して擦る。

「どうしてそんなに疲れてるんだい？分らないなんて言ったら寝台ベッドまで運ぶけど」

「からだはどこかで、ふわって浮いて……だれかに抱きしめてもらったような……」

「いと慈悲深き地母神よ、どうかこの者の傷に、御手をお触れください。こんな声は聞こ

えなかつたかい?」

「たぶん、わたしが、言った」

息も絶え絶えという様子ながら、どこか嬉しそうに彼女は答える。自分の身に何が起きたのかは分かつてなくても、どこかで喜ばしいものだと感じているのだろう。別に羨ましくないし? ボクも神さまと会ったことあるし? なんなら物証貫つてるし? いや親の形見とか残つてない姉さんが寂しそうな顔をするから、実際には見せびらかさないけど。

「上の姉さん兄さんが使つてるのをよく見るから分かるけどさ。それつて地母神様の奇跡だよ」

「きせき、わたしが?」

「さっきの冒険者さんに暖かい光が射したんだ。小さな傷も無くなつて、もう目を覚ましたんだよ」

「わたしが・・・あの人を癒したの?」

青い眼を大きく見開いて、か細い声で反芻する。そうなんだよ。姉さんが奇跡を授かつたんだ。凄いことだ。祈りで人を癒すとか、ボクの前世じやジーザスとかがやる事だ。奇跡つて凄いんだよ。ボクも無からパンを出したり水をワインに変えたりしたい。

「姉さんにお礼したいって言わせたからさ。包帯洗つたら一緒に行こ」

「言わせたつてもう。失礼なことしてないよね？」

「そりやもう言葉遣いとか完璧よ。第一印象には特に気を遣つてるしね！」

息も整つてきたようなので二人で洗濯を開始する。水を交換して擦る。水を交換して擦る。

数えるのが面倒なぐらい繰り返して、これなら替えの包帯にして大丈夫だろう、と二人が納得できるぐらい真つ白にした。新品同様！もしも《浄化ヒュアリフエイの奇跡が使えたら、この包帯はもちろん礼拝堂全体も一気に清潔にできるのだろうか？やはり奇跡には憧れる。いつかはなりたい戦神ウォープリースト官。

「じゃあ行こうか。疲れてるだろうし座つてて」

「わわつ、もう。急に動かしちゃダメだよ？」

姉さんの体（すぐく軽い！）を右肩に乗せ、洗濯籠を小脇に抱えて移動する。まずは包帯ブリーズスを神官の姉さんに届けて確認してもらおう。小さい姉さんが初めて奇跡を起こしたらしいことを報告すると、驚きと喜びの言葉が掛けられ、ボクには彼女を休ませるよう指示が出る。二人分以上に働きますとも。

「というわけで、こちらが《小癒ヒール》の奇跡で貴方を癒しました、私の自慢の姉です」

「姉……？」

引つ掻き傷だらけの鉄兜が、ボクたちを不思議そうに見比べる。

「こう見えて自分、十歳でして」

「そうか」

脚を折り曲げて屈み込み、肩からゆっくり姉さんを降ろす。少し怖いのか、ゴブリンスレイヤーさんとの間にボクを挟む。大した握力のないちっちゃな手が、只人で言うところのふくらはぎあたりをに添えられる。かわいい。

表情の分からない鉄兜が、しかししっかりと姉さんを見つめる。脚がぎゅつと掴まれた。振動感知器官でもある四肢は敏感なので、ちよつとくすぐつたい。

「お前が俺を癒したそうだな」

「はい、その、たぶん？」

ゴブリンスレイヤーさんは口下手だった。姉さんが半歩ほど後ずさりするのを広い視野で確認する。

「貴方は何の依頼をこなしてきたのですか？」

「ゴブリンを殺してきた。農村の依頼だ」

「そうなんですか？」

「つまり村を救った英雄ヒーローとそんな彼を救った立派な癒し手ヒーラーというわけです。お二人とも、もう少し胸を張って良いかと思えます」

「そうなのか」

「そう、なんででしょうか？」

どっちも凄いきこやつたんだから、自信を持つてほしい。未だ何も成し遂げていないボクとしては、肩身が狭くてしようがないのだ。

「冒険者さんはこの神殿を知っていましたか？」

「いや、知らん」

「このように傷を癒したり、何かと助けになるでしょう。自分の周りに何があるのか、もう少ししっかりと把握することを勧めます。他にも貴方の役に立つものが見つけられるでしょう」

「そうか」

一見無関心に見えて、その実、素直な返答。言葉が足りなすぎる。少し呆氣にとられていた姉さんを前に出す。

「冒険者を、貴方を助けてくれる人はいます。少なくとも地母神の神殿はか弱い孤児にだって開かれています。ぜひ頼ってください。そして世話になったらお礼を言ってくださいね」

今も周りには沢山の冒険者たちが横たわり、真剣な顔の神官たちが彼らを癒している。いけないいけない、長話してる暇はなかった。ボクはアホか。つつい知ってる人が居たから嬉しくなって、調子に乗っていた。情けないことこの上ないぜ。

「じゃ、ボクは忙しいので後は若い二人でよろしく！姉さんはゆっくり休んでね！」
「えっちよつと！」

ボクはすつくと立ち上がり、走ると危ないのでこの長い脚（胴体の横側から生えている）を動かして早歩きで立ち去る。いきなり置き去りにした姉さんのお叱りは後で聞こう。自分でも忘れていたがボクは忙しいのだ。

国や冒険者がゴ布林ばかり相手にしてられないのと同様、ボクもゴ布林スレイヤーさんだけに構ってちゃあいけないのだ。あそこにいるのは重戦士さんじゃーんとか思ってたあ強いヒーローになれないぜ。知ってる人も知らない人も、みんな頑張ったしこれからも頑張っていくのだから。ボクが冒険者を目指す以上、全員が尊敬すべき先輩だ。

「ありがとう」

八つ目でも捉えられない真後ろから、穏やかで低い声が聞こえた。その言葉は姉さんだけじゃなく、ボクに対しても向けられているんじゃないか。そんなことを思うのは自惚れだろうか？ いやいやこの危険な世界で生きていく以上、慎重に考えるに越したことはない。調子に乗らず迂闊な期待を持たず、目の前のことをしよう。奥ゆかしさ重点だ。

しかし頭、心臓、手先と体のそこら中が熱くなっているのを感じる。ゴブスレさんば

かり特別扱いしちやダメなんだってば。ちやちやつと切り替えたまえボク。
「先輩、何かボクに手伝えることある？」

朝が来る（オープニング・デイズ）

四方世界において、ゴブリンは最弱の魔物だ。十歳の子供でも知ってる通りの事実である。

脅力とおつむは只人の子供ほど。自分たちの手で新しいものを作ろうという発想は持たず、他者から奪ったもののみを用いて生きる。貧弱な種族だ。

とはいえ、あらゆる能力においてゴブリンが他の種族に遅れをとるわけではない。

例えば暗視。光が無くとも連中は不自由しない。五年前、手痛い授業料を払うことになった。

他には残虐性。同族に対してでも同情することはなく、誰かを罠り殺すためならば、創造的にすらなれる。これも五年前に知った。

あとは繁殖力。母体さえあれば数日で増える。それらは早熟で生まれつきのゴブリンだ。これを知ったのは五年前ではない。俺に甥はいない。

だから俺の、ゴブリンスレイヤーの朝は早い。ゴブリンと暗所で戦う以上、訓練をするなら夜明け前だ。連中は夜行性だから早朝の見回りも必須だ。連中はすぐに増える。どこに湧いて出るか不思議ではない。特にここは危険だ。群れを形成するために家畜

や女を攫う。

幼馴染に用意された自室から、足音を殺して抜け出る。先日の農村での戦いから学んだ、小鬼斥候の痕跡が無いが綿密にチェックしながら歩き、納屋で装備を整えて外れの森に入る。

只人が持つ最大の武器の1つは投擲であるという。頑強な肉体を持つ鉈人ドワーフや弓を引けば右に出る者なき森人エルフ、生まれながらに足音立てぬ圃人レイアよりも、物を投げることにについては只人が抜きん出る。らしい。圃人のニンジャである師は凄まじく正確な投擲技術を幾度も自分に向けて放っていた。ゴブリンにも個体差があるのだ。例外などいくらでもあるだろう。他の種族については伝聞に過ぎず、直接知っているわけではない。「いや、鉈人は知っている」

ゴブリンを殺す為の装備を鉈人から買っている。その事実（注1）誤認。親方は鉈人ではなく、鉈人に激似の只人である。を思い浮かべると全く同時に、口から言葉が漏れていた。迂闊なことだ。殺したゴブリンの数を数える時のような、意識的な発音とは全く別のもの。

「油断してはならない。すぐそこにゴブリンが隠れているかもしれない」

口にすることで事物への集中力を高め、意識と記憶により強く刻み込むことができ。それを自分に教えたのは姉だった。知識神の寺院では、物事を学ぶための技術と機

会が与えられるのだという。冒険者たちが互いの装備品を指差し確認してから出発するところを少し前に見た。

ふと気づくと目的地に到着していた。少し前に蟲人の侍祭アコライトから、自分の周りの人間をよく見ると言われた。視野を広げて情報を集めよという意味であろう。本人はそういう意味で言っていない。最も重要な知識は無知を自覚すること、学ぶ必要があると知ることであると言う。姉から教わり、先日は見知らぬ侍祭に忠告された。知識の使い道を常に考えることも、師から叩き込まれた。俺は恵まれている。

だが、周囲に目を向けたつもりで注意力を散漫にするのは馬鹿のすることだ。野外で思い巡らせて、気がついたら到着していた？ 間抜けが過ぎる。

「目の前に集中しろ」

今すべきことのみ、考えろ。

ゴブリンの頭の高さに印を付けた木に向けて、武器を投げる。刀身をすり減らした元長剣を、手斧ハンドアックスを、手槍ジャベリンを、短剣ダガーを投げる。ゴブリンは弱いものだから、ほどほどの一撃で行動不能にできる。数では常に不利なのだから、囲まれる前に頭数を減らすべきだ。敵は暗闇に潜むのだから、光源に頼らず当てる必要がある。

故に練習あるのみだ。ゴブリンの体格は田舎者ホブを除けば共通している。だからゴブリンの首の高さに武器を投げる。走りながら投げる。振り向きざまに投げる。盾を構

えて投げる。自分にどんな動きができるか、どの程度の距離なら適当な威力と精度を出せるのか。確かめて、向上させる。知恵も才能も持たずに生まれた以上、研鑽だけは怠れない。

生まれや育ちは骰子ダイスの出目次第だとしても、自分の心と体は自分だけのものだ。思い通りに扱えるよう研ぎ澄まし、どこまでやれるか見極める。

どれだけ投げたか、どれだけ時間が経ったかはわからないが、多少の疲労が出たのだろう。粗末な手斧があらぬ方向へ飛んだ。そろそろ潮時か。そう思っていた時のことだ。

「うひゃあ!!?」

ゴブリンか?

森の中の偶発的遭遇ランダムエンカウンター。数は不明。手には円盾のみ。音を殺して右へ5歩、足元の剣を引き抜く。多少土が付いているが、問題はない。近くの木の裏に身を隠す。森ゴブリンという名は聞いたことがある。この程度の木なら登れるだろう。草陰に身を潜めているかもしれない。緑の肌は保護色となる。なるほど、森のゴブリンは厄介だな。

ゴブリンはともかく、俺はどう動くべきかと考えていると声が続いた。

「これ手斧じゃん怖っ!ハッ、この粗末な手斧はゴブリンか!」

ゴブリンではなかった。

「蟲人生初の戦闘はある日森の中でゴブリンとお！物騒だなあ四方世界！初めての冒険といえどゴブリンと聖騎士も言ってたがボカアまだ冒険じゃないぞ！心も技も装備も準備できてないよ初手人型生物を素手で殺すのは流石にハードモードですよ神さま！おっとこんなところに手斧生えてんじやん引っこ抜こうとしたら折れたわ！」

「俺はゴブリンではない」

今後は事故のないよう、開けた場所で訓練しようと誓った。

「お見苦しいものを見せました」

「いや」

遭遇者はゴブリンではなかったが、緑色の肌をしていた。体表と言うべきかもしれない。身長は6²フィート¹ほど、頭部に8つの単眼と2つの顎。2本の腕は只人とおなじ形だが、体の真横から生えている脚は蜘蛛のそれに近いようだ。強引に〈彼〉のかたちに合わせたらしい、つぎはぎだらけの法衣の長い裾から覗かせる、関節の多いつやつやした脚には鋭い3本爪が備わっている。

街の神殿で俺を介抱した、蟲人侍祭であった。

「朝から訓練ですか。精が出ますね」

「ああ」

「しつかり休んでいますか」

「・・・問題ない」

「戦い続けるには、たたかうだけではいけませんよ。ご自愛ください」

初めて対面したときもそうだったが、自分を見透かされているような感覚がする。格の高い聖職者は物の価値を見抜くことができるという。彼もさぞ高位の神官なのだろうと思っていれば、幼い少女——10歳ほどだろうか——を姉と慕ってみせた。蟲人というものは身心の成熟が早いのだろうか。

「聞いていますかゴブリンスレイヤーさん」

「ああ」

「食事はきちんとしていますか」

「ああ」

「では昨日は何を食べましたか」

「シチューだ」

「それは自分で作りましたか」

「いや」

「ならば作ってくれた方にしっかりとお礼を言つて、ちゃんと会話をしてくださいね」

「……………」

「人はみな大なり小なり、誰かの世話を受け、誰かの世話をして生きるのですから、互いに礼を尽くすのは大切です」

「そうか」

「まあ私なんかはどうでもよいですが、身近な人とはちゃんと言葉を交わしてください。ああ、とかそうか、だけでは駄目ですよ」

「む」

「身近な人、と言われるとそれは大切なことだと思ふ。思わなければならない。どうすればいいかはわからないが、すべきことだとは思ふ。」

「貴方の周りにどんな方が居ますか？」

「……………俺の帰りを待つていてくれる人がいる。それから、家に置いてくれている人も」

「特におじさんとはもつと話すべき事があるのだろう。つい最近、三叉フォークを突きつけられることになった。どうしてそうなったのかわかっていないが、俺がそうされるだけの事をしたのだから。」

「んー、その2人だけですか？もうちよつと他に、よくお世話になっている方とか居ませ

んか？」

「そうだな……ギルドに1人いる」

「おお！」

「装備を整えてもらっている。彼に勧められた兜には、何度も助けられた。水薬ポーションにもだ」

「惜しい」

なにか間違えたらしい。少し考えると、心当たりが1つ。

「お前に言われた通り、槍使いの冒険者に礼を言った。倒れた俺を神殿まで運んだことについてな」

「これも惜しいけど、それは良かったです」

「だが、奴は否定した。人違いだったらしい」

「それは多分照れ隠しですね」

「そうなのか」

人と話すのは難しい。

「貴方を冒険に送り出し、帰りを待ってくれる方がもう1人いますね？」

「……受付嬢か」

蟲人侍祭と彼女は関わりの無い筈だが、想像力豊かなものだ。確かに彼女には、いつも世話になっている。彼女の仕事があつてこそ、俺はゴブリンどもを殺すことができ

る。色々と指南や注意を受けることもあったか。そう考えると多くの恩があるの
う。

彼女の顔を思い浮かべて、1つ閃いた。俺が牧場主にすべきことを1つ。ギルドは冒
険者の宿でもある。今はあまり余裕がないが、出来る限り早いうちにまとまった額の家
賃を払うべきだ。金銭は誠意の形の1つとして通用する。

「受付嬢には世話になっっている」

「そうでしょうね」

「色々と忠告も聞かされた。俺は未熟だからな」

「有り難いことですから大事にしましょうね」

「お前もそうだ」

「エツ」

思えば彼は、初めて会った時にも何かと手を尽くしてくれた。とても世話焼きな人な
のだろう。神官気質とでも言うのだろうか。今も投擲練習に使った武器を、半分近く運
んでいる。辺りに散乱するそれらを、あまりに素早く拾って有無を言わせる暇も与えら
れなかった。主導権を完全に握られた結果だ。

「見ず知らずの仲なのに、お前はよく面倒を見る」

「初対面から既に超熟知り顔で説教してすみませんでした今は反省しています」

とても早口だった。よくも舌が回るものだ。いや、見る限り人間のような舌は持ち合
わせていないようだが。どのようにして発音しているのだろうか？

「お前はお節介なのだろう」

「お恥ずかしい限りです」

「だが、助かっている」

彼に礼を言うと距離を取られた。何故だろうか。